

# 町家合宿 in 京都 Vol.14

## ～お金の使い方②～

山下桂永子

### ☆町家に着いてまずやること

駅から徒歩10分ほどでいつもの宿に到着。のれんをくぐり、「こんにちはー、今年もお世話になりますー」と私が少し大きめの声を出すと、「はい」という宿のあるじの声。参加者に声をかけつつ玄関から靴のまま奥に進み、台所から靴を脱いで広い畳の共有スペースにあがりこむ。

荷物を下ろすと宿泊が初めての参加者やスタッフにはあるじが宿の説明をする。私もその説明を聞きながら「最近のおうちは、ベッドが多いだろうし、合宿とかの経験なかったら、シーツを自分で敷くとか初めてかもねえ」「毎年この自分の職業欄になんて書くか迷うんだよねーうーん」とかつぶやいたりしながら宿泊者カードに記入して、封筒とお財布、メモとペンを準備する。

### ☆参加費を受け取る時のプレッシャー

宿に着いた私の最初にやるべきことは、ちょっと緊張しながらの参加者からのお金の徴収と、宿泊費の支払いである。ちょっと緊張するのは普段あまり現金をもらったり渡したりする仕事ではないからなのかもしれないが、それ以上に、このお金をどう遣うことが援助的であるのかという、責任というかプレッシャーをここで感じてしまうからかもしれない。

参加者から参加費を受け取る時、その参加費は参加者が親から持たされた封筒に入っていることが多い。そしてその封筒には現金だけでなく、そのお金を持たせた保護者の方からのお手紙が一筆添えられていることがある。内容はいろいろだが、そこには引きこもっている、あるいは引きこもっていた我が子が、自分の意志で京都の寺社仏閣をめぐり、大学を見学するツアーに参加することへの不安や期待がつまっている。その保護者の不安や子どもの変化への期待に応えることに対するプレッシャーが、参加費を受け取る時の私の緊張になっているのかもしれない。



## ☆赤字続きの町家合宿

町家合宿の宿は、あるじのご厚意により貸し切りで泊まることできる。貸し切りなのでどの部屋で寝ようがほぼ自由だし、台所も共有スペースも好きな時間に使うことができる。他の宿泊客に気を遣うことがないのでとてもありがたい。

とはいえ、3人で泊まろうが10人で泊まろうが貸し切りなので宿泊料は変わらない。毎年お世話になっているこの宿は、京都の町家（しかも建物が文化財指定）に泊まるには、あまりにもありがたい値段設定ではあるのだが、それでも参加者が少ない場合は、お金を徴収して宿代を支払った時点で赤字が確定している年もある。

## ☆赤字の理由①～参加者の人数～

町家合宿を始めて最初の数年は、どうすれば赤字にならずに町家合宿を運営できるのかというのは悩みの種であった。スタッフの方から宿泊費だけでも徴収することを考えたことはあったが、自分がやりたくてやっている町家合宿に、お願いして巻き込んでやっている手前、それは気がひけるような気がしていた。どこかの助成金を申請することなども考えたが、その申請の手間を考えるととても自分にはできないような気がしていた。

となれば参加者を増やすしかないのではあるが、いかんせん自分の手の届く範囲内で不登校や引きこもりの経験者である参加者を募集して、一人ひとりと（あるいはその保護者と）やりとりをしながら当日来るかどうかもわからない状態で当日を迎えるというやり方ではそうそう参加者を増やすことはできない。

## ☆赤字の理由②～スタッフの人数～

しかも、ただ参加者多くなればいいというわけではなく、参加者が多くなればスタッフが足りなくなり、配慮も行き届かなくなるので、参加者の安全はもちろん、安心して過ごしてもらうことも難しくなる。スタッフを増やすということは、スタッフの町家合宿での活動費が必要になってくるし、そもそもスタッフを増やすことは参加者を増やすよりも大変である。スタッフが対人援助職であるという必要はないものの、ある程度町家合宿の援助的な意図を理解してもらったうえで柔軟に対応してもらえる方でなくてはならない。しかも2泊3日ボランティアである。

以前、あるスタッフAさんに「なんでこども（参加者）に対して、こんなスタッフ（マンツーマンに近いぐらい）必要なんやろうって思ったけど、行ってみてわかった。これ、絶対必要や。びっくりした。」と言われたことがある。Aさんによると、町家合宿の私は「優しいけど厳しい。」のだそう。参加者が、京都の夏の暑さであったり、観光地の人の多さであったりで、うなだれて足が止まってしまったり、他のメンバーと一緒に行動することができなくなってしまうことがある。そうしたときに私が「ちょっと水分取って休憩しよかー。」とか「ほなここでちょっと別行動して後で合流しよかー。」と言う。他のスタッフにその動けなくなった参加者に付き添ってもらって、何食わぬ顔で他の子と談笑しながら休憩したり、

あるいは別行動で着々とスケジュールを遂行する。そのことに A さんは驚き、そのためにスタッフが必要であると思ってくれたらしい。「山下さん、こどもに寄り添うけど、にこにこ笑いながらぜーったいあきらめさせへんねんもん。びっくりしたわ。」と。

### ☆赤字の理由③～目に見えない心理支援～

A さんは、カウンセラーでも教員でもない。そんな A さんから「寄り添うけどあきらめさせへん」と言われて私のほうこそ驚いてしまったし、なんだかうれしくもあったのだが、よく考えてみれば、私が普段の仕事でやっていることのスタンスそのままだと思う。気持ちに寄り添い、相手が願う変化を応援することはこれまでずっとやってきたことである。

個に寄り添い、支援をしていくということは、心理的支援をやっている身としては基本(?)スタンスなのであるが、それを町家合宿という小さくとも集団の中で(しかも炎天下の観光地で)やるのが A さんには新鮮に映ったのだろう。この私の町家合宿でのスタンスは、スクールカウンセラーをしていたり、適応指導教室やフリースクールという組織や集団の中で子どもの支援に関わっているからこそ、あまり意識せずにやっていることなのかもしれない。

### ☆町家合宿赤字脱出

さて、実は現在、赤字はほぼ脱出している。というのも先に出てきた A さんはある子どもに関わる NPO の理事をしている。ある方のご紹介で数年前から私はこの NPO に関わらせていただくことになり、その結果、その NPO のイベントの 1 つとして町家合宿をさせていただくことで、その NPO から予算をいただくことができるようになったからである。なんともありがたい話である。が、今までは苦手な適当にしていた予算計画や領収書の計算には頭を悩ませてしまっている。

